



アナキズムと反植民地主義的ナショナリズムの対位法的読解

土佐, 弘之

(Citation)

東南アジア研究, 50(2):303-308

(Issue Date)

2013

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008846>





アナキズム*と反植民地主義的ナショナリズムの 対位法的読解

土佐 弘之**

Interpreting Anarchism and Anti-Colonial Nationalism Contrapuntally

TOSA Hiroyuki**

- ベネディクト・アンダーソン. 『三つの旗のもとに——アナキズムと反植民地主義的想像力』(山本信人訳, NTT 出版, 2012 年, 346p.) (原著 Benedict Anderson. *Under Three Flags: Anarchism and the Anti-Colonial Imagination*. London: Verso, 2005, 255p.)
- Maia Ramnath. *Haj to Utopia: How the Ghadar Movement Charted Global Radicalism and Attempted to Overthrow the British Empire*. Berkeley: University of California Press, 2011a, 332p.
- ———. *Decolonizing Anarchism: Antiauthoritarian History of India's Liberation Struggle*. Oakland: AK Press, 2011b, 180p.

ジェイムス・スコットの近著『統治されないようにする術』に代表されるように [Scott 2009], アナキズムの視座からのグローバル・ヒストリーの書き換えという試みは最近流行にさえなっている感がある。アングルは違うもののアナキズムというエントリー・ポイントからグローバル・ヒストリーの再構成を行う野心的な試みとして、ベネディクト・アンダーソンの『三つの旗のもとに』も、その一つに挙げてよいであろう。奇しくも二人が東南アジア研究者である点が興味深いが、その背後には、東南アジアと呼ばれる地域が相対

的に国家の論理が貫徹しにくい地域だったこともあり、アナキズムという視座からの歴史的ナラティブを積極的に展開する可能性がより大きかったという事情も働いていると思われる。それは単に西洋的なウェストファリア・システム（主権国家体系）の論理が浸透していくことが遅かったというだけではなく、それ以前においても、インドや中国の文明圏からも離れていたこともあるだろう。つまり、それらの文明的コードの模倣による伝統的なマンダラ国家権力の及ぶ範囲がまだら状態であったことから、東南アジア地域には、広い意味での国家権力の浸透していない空間、逆に言えば中央集権の権力から相対的な自立性を保っていた生活空間を散見することができたということがある。アナキズム的な志向性をもった、つまり自立、自由、非支配といった価値に重きをおく研究者が、そうした時空間に思い入れをもつことは、ありそうな話である。

* 本稿では、引用した本のタイトルでアナキズムという表記が使われている場合以外はアナキズムに表記を統一した。

** 神戸大学大学院国際協力研究科; Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University, 2-1 Rokkodai-cho, Nada-ku, Kobe 657-8501, Japan
e-mail: tosa@kobe-u.ac.jp

アナキズムのスピリットを東南アジアに求める先駆的な仕事と言えば、鶴見良行『マングローブの沼地で——東南アジア島嶼文化論』を想起される方も多いであろう。鶴見は、この本の最初で、次のように述べている。

ここにネーションというまとまりの意識が成熟しなかったのには、それなりの理由がある。それはこの土地の生産様式と文化が、移動可能な分散的なものだったからである。インドネシアからフィリピンまで、村むらには、かなり共通の生産様式があるのに、まさにこの移動性、分散性という性格のゆえに、全体のまとまり具合ははなはだ悪かった。東南アジアの民衆も、自立を重んじるけれども、その自立は、中国の漢人の場合と違って、移動、分散を許す考え方である。こうした移動的、分散的な文化こそ、マングローブの沼地から生まれたものであった。[鶴見 1984: 7]

このように、東南アジア島嶼部の「マングローブの沼地」に鶴見が見いだしたものを、スコットは「ゾミア」と呼ばれる東南アジア大陸部の山岳地域に見いだした訳だが、¹⁾ アンダーソンは、そうした自立的空間を、具体的な地理的空間に求めずに、ホセ・リサルたちが文学的世界に展開する「想像的なもの」に見出そうとしたとも言えよう。新たな「想像的なもの」は、19世紀末の初期グローバリゼーションの下でヨーロッパを中心に形成されつつあったアナキストの国際的なネットワーク、それとも絡むキューバ、プエルトリコ、そしてフィリピン等における反植民地主義（民族解放）の思想・運動、さらには前衛的な表現を模索する文学者からなる「世界文学共和国」といったものを媒介にして初めて可能となったものである。

著者の言葉によれば、『三つの旗のもとに』は、「地球の各地で発生した戦闘的なナショナルリズムの

あいだに働いていたアナキズムの秘めたる引力を地図上に描くような『政治の天文学』とも呼ぶべき試みである。つまりフィリピン独立運動は、バルセロナ、パリ、ロンドン、横浜と、当時、世界を席卷しつつあったトランスナショナルなアナキズム運動という強力な磁場の中で生成された側面があるということであろう。それは、ホセ・リサールの小説『エル・フィリプステリスモ』に描かれている、植民地エリートが列席する盛大な結婚式で爆破させるべく仕掛けた「宝石を散りばめた柘榴の形のランプに隠した巨大なニトログリセリン爆弾」に象徴されている。²⁾ リサルは、爆弾を前にした主人公のシモウン³⁾に次のような台詞を述べさせている。

「これは、ニトログリセリンよりは、ちょっと上のものだ！濃縮した涙、圧縮した憎しみ、不当行為、被害だ！これは弱者の最後の理論だ、武力には武力を、暴力には暴力をというやつだ……ついさっきまでは、わたしはためらっていた、だがあなたが来て、わたしに確信を与えてくれた！今夜こそ、もっとも危険な暴君たち、神と国家とのうしろに身をか

2) これと似たような植民地的支配に抗する象徴的暴力として想起されるのが、目取真俊の小説「希望」である。沖縄での米兵による女性の強姦事件に業を煮やしアメリカ人の幼児を誘拐し殺してしまう犯人が語り手となっている問題作であるが、不可視化されている国内植民地的状況を象徴的暴力によって告発するという手法は、リサールの小説におけるそれを彷彿とさせる点がある。一言で言えば、表象芸術における法措定的な象徴暴力の発言という手法は1世紀経った今も廃れていないということと同時に、ポストコロニアル状況は1世紀前の植民地支配状況とあまり変わっていないということになろうか（「希望」は、目取真俊『沖縄／草の声・根の意思』世織書房、2001年、287-290ページに所収）。

3) アンダーソンの翻訳（山本訳）だと、『エル・フィリプステリスモ』の主人公について、シムーンという表記[2012: 55, 58, 59 など]とシモウンという表記[同上書: 153, 167, 229 など]が混在しているが、此処では、リサールの小説の翻訳（岩崎訳）に従って、シモウンと表記する。

1) アナキスト研究者が思い描く理念としてのゾミアと実態としてのゾミアとの間にズレが生じるのはありがちなことで、「実証的」研究者は当然、そのズレを厳しく批判することになる[Daniels 2010]。

くしている無責任な暴君たちが、そしてその権力濫用は、検察することのできる者がいないものだから、いつまでも罰せられることのない暴君たちが、こなごなになるのだ！今夜こそフィリピンは、わたしが腐敗を早めたぶっかっような記念碑にかわる、その爆音を聞きましょう！」[リサール [1891] 1976: 248]

ここの台詞だけ読んでも、直感的にリサールの小説に投入されたアイデアが、当時のアナキズム運動や「世界文学共和国」などに多くを負っていることは容易に推測できよう。アンダーソンは、そうした断片的な情報から、さらにより直接的な証拠を求めて、『フィリプステリスモ』の原稿のファクシミリ版から私信、さらには蔵書目録などをかき集め、探偵さながらに執拗に探索を続けていく。スタイルとしてはモンタージュ技法を援用しながら、その報告書として書かれたものが『三つの旗のもとに』ということになる。

この種のテーマで比較文学的アプローチということで言えば、まず想起されるキーワードがサイードの言う「対位法的読解」である。サイードは、『文化と帝国主義』の中で、対位法的読解について次のように述べている。

わたしが「対位法的読解」と呼んだものは、実践的見地からいうと、テキストを読むときに、そのテキストの作者が、たとえば、植民地の砂糖プランテーションを、イギリスでの生活様式を維持するプロセスにとって重要であると示しているとき、そこにどのような問題がからんでくるかを理解しながら読むことである。(中略)要は、対位法的読解は、両方のプロセス、つまり帝国主義のプロセスと、帝国主義への抵抗のプロセスの両方を考慮すべきであるということだ。テキストを読むときに、視野をひろげ、テキストから強制的に排除されているものをふくむようにすればいいのである。[サイード [1993] 1998: 137-138]

帝国主義のプロセスと帝国主義への抵抗のプロセスを同時に読み込んでいく作業は、実際にはさ

まざまなやり方が考えられるであろうが、帝国主義への抵抗のプロセスそのものが、帝国主義のプロセスの意図せざる帰結である点で、それぞれの旋律が当初から対位法的に構成されていたとも言える。そのことと深く関連するのが、アンダーソンの指摘する〈比較の悪魔 (demonio de los comparaciones)〉という重要な契機であろう[アンダーソン 2012: 74]。「フィリピン・ナショナリズムなるものは、フィリピンではなくスペインの都会という空間で芽生えた」[同上書: 92]と指摘されている通り、例えばマドリッドにおいてマニラを想うことで、故郷での階層に関わりなく、スペインで彼らはみなフィリピンになりえたのである。加えて、キューバなど他の地域での反植民地主義運動の動向を知りえたことが追い風となり、さらに、例えばバルセロナのモンジュイック監獄につながれるようなアナキストたちとの接点をもつことで、腐った支配の廃絶を目指す政治的ラディカリズムへと突き進んでいくことになる。そうした〈比較の悪魔〉に突き動かされる形で、リサールは、まず『ノリ・メ・タンヘレ』で同時代の全フィリピン社会を想像することを試み、そして『エル・フィリプステリスモ』では、フィリピンにおける既存の政治支配権力の崩壊という可能性を想像してみたのである[同上書: 229]。そして、リサール自身はボニファシオの率いるカティプーナンの叛乱を実際には支持しなかったにも拘わらず処刑されたにせよ、リサールが書いたものは彼の意図を離れて、叛乱を誘発する「紙爆弾」となっていたことは間違いない。

アンダーソンは、こうしたリサールの軌跡にとどまらず、さらにイサベロ・デ・ロス・レイエスやマリアノ・ボンセといった二人が辿った足跡、彼らを取り交わした数多くの書簡などを追跡することによって、初期グローバリゼーション時代におけるトランスナショナルなアナキスト・ネットワークと反植民地主義ナショナリズムとのシンクロ現象を示す状況証拠の数々を挙げていくことになる。アンダーソンは対位法的読解を徹底的に推し進めることで、結果として従来のナショナル・ヒストリーを超えながら、アナキズムの視点もまじえた、もう一つのグローバル・ヒストリーの範

例を提示することに至ったと言えよう。

『三つの旗のもとに』は、そのタイトル（そして原著の表紙）が示す通り、国際的アナキズムとフィリピンやキューバの反植民地主義的ナショナリズムの間の相互触発という現象に対して、対位法的読解を推し進めることを通じて光を当てた訳だが、表層的な理解によれば、アナキズムとナショナリズムは対極のものであり、互いに罵りあう位置にあるはずである。たとえば、キューバでの武力蜂起（1895年）を先導したマルティ・ホセは、アナキズムは〈パトリア（patria）〉の概念を否定していると考えアナキズムを徹底的に攻撃し、その一方で、「アナキストの目には、ナショナリスト指導者はひたすら国家権力を渴望し選挙を盲目的に崇拝していると写り、それゆえに独立が労働者の現実生活改善に資するところは少なくないと考えられた」と、アンダーソンも認めている〔アンダーソン 2012: 256〕。しかし、彼は、次のような注もつけている。「理論的にはそうであるかもしれない。しかし、キューバのナショナリズムは土地土地で多数のアナキストをマルティ側に引き寄せた」〔同上書：257（注44）〕。融通無碍で矛盾に満ちた政治思想・運動とされるアナキズムであるが、その最大公約数的価値を支配の廃絶を通じた自由の最大化にあるとすれば、植民地支配からの解放を求める反植民地主義的ナショナリズムとの接点が多々あることは理論的に考えても不思議ではない。特に農民が大多数を占めていた植民地社会において植民地支配からの解放を目指す思想・運動にとって、工業化過程で生まれるプロレタリアートに特別な歴史的役割（革命のエージェンシー）を想定したマルクス主義より、より広く国家（支配）の廃絶を訴えるアナキズムの方が連携しやすかったということであろう。

そうしたアナキズムと反植民地主義的ナショナリズムとの緊密な関係について、インドのガダール（Ghadar）運動に焦点を当てながら理論的な考察を行ったものが、マイア・ラムナスによる二つの著作、『ユートピアへの巡礼』と『アナキズムを脱植民地化する』である。ラムナスは、ニューヨークを中心に活動を行っており、アナキスト研究所のメンバーでもあり、後者は研究所の叢書の一冊

として出版されたものである。「ガダール」はウルドゥー語で叛乱を意味しているように、ガダール運動とは、1910年代、サンフランシスコに在住していたパンジャブ出身者を中心に結成されたガダール党によって推し進められたインド独立運動を指す。その歴史的経過については、『ユートピアへの巡礼』の方で詳細に説明されている通りであるが、当初、サンフランシスコで活動を始めたガダール党のメンバーもまた、国際的なアナキスト・ネットワークや孫文など中国のナショナリストさらにはアイルランド、エジプトなどの活動家とも結びつきながら、ちょうど大英帝国の裏に張り付くような形で世界的規模でのネットワークを形成することになる。⁴⁾その後、ナショナリズム色を強めるとともに第一次世界大戦中にはドイツの支援も受けながら武力闘争路線を突き進み、のちには共産主義の色彩を強めモスクワとのつながりを強めるといったように、変転する時代状況に合わせて、その政治的性格を大きく変えていった。そして闘争戦術の過激化とともに大英帝国による弾圧は激しさを増し、主要メンバーの多くが刑に処せられ、⁵⁾残った者もアメリカなど世界各地への亡命を余儀なくされ、同運動はやがて下火になっていく。しかし、その伏流の一部は、のちのチャンドラ・ボースのインド国民軍などの動きにもつながっていき〔Ramnath 2011a: 233〕、独立後のインド政治にも影を投げかけることになる〔*ibid.*: 236–237〕。

ガダール運動のみならず、さらにはタゴール、ガンジーなどの反植民地主義の運動・思想をも射程に入れて、アナキズムという参照点から再検討し、そこから引き出したインプリケーションをまとめたものが、『アナキズムを脱植民地化する』である。そこで示されている重要なポイントの一つは、アンダーソンの議論ともかなり重なってくる

- 4) 例えば、ガダール党創設メンバーの一人であるハル・ダヤルはクロボトキンと会ったりしているし、党のメンバーにブルードン、バクーニン、クロボトキンなどの思想は大きな影響を与えたという〔Ramnath 2011b: 81, 111, 149〕。
- 5) 1915年のラホールでの共謀罪事件裁判で絞首刑を科された者は42人におよんだ〔Ramnath 2011a: 60〕。

が、「反植民地主義運動とアナキズムの思想・運動とは多くの共通点を有している」[Ramnath 2011b: 26-28] ということである。ラムナスは大文字のアナキズム（サークルA⁶）に象徴されるブルードン以降のヨーロッパのアナキズム思想・運動）と小文字のアナキズム（時空間を問わず見られるアナキズム）とを分けて考える必要があるとしているが、19世紀末から20世紀初めにかけての反植民地主義運動は、前者の大文字のアナキズムと接点があったということだけではなく、後者の小文字の（土着の）アナキズムの要素を内包していたという点をおさえる必要があろう。特に後者の小文字のアナキズムという要素は、ガンジーの思想に色濃く見られる。そうしたことをおさえることで、つまり大文字だけではなく小文字のアナキズムという参照点を導入することで、「国民国家の歴史」というプロットに沿って構成されてきた従来の脱植民地化（de-colonization）のナラティブから捨象されてきたものを見直すとともに、脱植民地化についてのオルタナティブな歴史物語の再構成が可能になるというのが、ラムナスの主張である。

こうした脱植民地化についてのオルタナティブな歴史物語への挑戦の背景には、現在の「新しいアナキスト」[Graeber 2002]の台頭という状況もあるのではないだろうか。チュニス、カイロ、トリポリといったアラブ革命、またそれにも触発されたニューヨークなどでのオキュパイ運動など、「新しいグローバル革命」[Mason 2012]とも言われる、現在起きている叛乱のシンクロ現象は、ちょうど1世紀前にリサール達が目撃したものを彷彿とさせるところがある。そうした中で、新しいアナキストの動向は無視できないものになってきている。そうした趨勢を意識してか、アンダーソンは、序文で、ニューヨーク市警察のトップが2004年共和党大会で、脅威は共産主義者でも狂信的なムスリムでもなく、実はアナキストであると述べ

たということに触れ[アンダーソン 2012: 11]、後記では、フィリピン大学でアナキストのピラを自分で拾ったエピソードを紹介したりしている[同上書: 321]。

つまり、初期グローバリゼーション期におけるトランスナショナルなアナキスト・ネットワークと反植民地主義運動の交差という事象の掘り起こしに基づく、もう一つのグローバル・ヒストリーのナラティブが可能になったことの遠因の一つとして、「新しいアナキスト」の台頭を後押ししている後期グローバリゼーションという今日的な時代状況があるのではないだろうか。言い換えるならば、我々が直面している「新しいアナキズム」[土佐 2012]の時代を読み解くために、アナロジーを適用する形で初期グローバリゼーションの中に「歴史的な過去」とは別の「有用な過去」[Oakeshott 1983: 35]を読み込もうとしている、という側面がないといったら嘘になるだろう。〈比較の悪魔〉は、異なる空間をつなぐだけではなく、異なる時間をつなごうとしている。

参考文献

- Daniels, Christian. 2010. 書評 James C. Scott. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. Yale University, 2009. 442 p. 『東南アジア研究』48(2): 205-210.
- Graeber, David. 2002. The New Anarchists. *New Left Review* 13 (Jan/Feb): 61-73.
- Marshall, Peter. 2011. *Demanding the Impossible: A History of Anarchism*. Oakland: PM Press.
- Mason, Paul. 2012. *Why It's Kicking Off Everywhere: The New Global Revolutions*. London: Verso.
- Oakeshott, Michael. 1983. *On History and Other Essays*. Totowa, NJ: Barnes and Noble Books.
- リサール, ホセ. 1976. 『反逆・暴力・革命——エル・フィリプステリスモ』岩崎 玄（訳）. 井村文化事業社. (原著 Jose Rizal. 1891. *El Filibusterismo*. Gent: Boekdrukkerij F Meyer-Van Loo)
- サイード, エドワード. 1998. 『文化と帝国主義』大橋洋一（訳）. みすず書房. (原著 Edward Said. 1993. *Culture and Imperialism*. New York: Knopf)

6) サークルAについては、ブルードンの「アナキーは秩序である」という箴言に由来するものとされているが、実際に、このシンボルが世界中に流布するようになるのは1960年代で、同時期のフランスの学生運動を起点に広まったとされている[Marshall 2011: 445, 558]。

Scott, James. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Heaven: Yale University Press.

土佐弘之. 2012. 「野生のデモクラシーについて

——新しいアナキズムのグローバル・ポリ
ティクス」『国際政治』168: 131-145.

鶴見良行. 1984. 『マングロープの沼地で——東南
アジア島嶼文化論』朝日新聞社.